

群馬県前橋市

天神風呂 N 地点 遺跡

—市道 00-360 号線（大胡 110 号線）道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2020. 3

前橋市教育委員会

群馬県前橋市

天神風呂N地点遺跡

—市道 00-360 号線（大胡 110 号線）道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2020. 3

前橋市教育委員会

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国を中心として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元總社地区に山王庵寺、國府、國分僧寺、國分尼寺など上野國の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が籠をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた鷹橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する天神風呂N地点遺跡は、縄文時代から平安時代に至る集落が確認された天神風呂遺跡の南側に近接しており、市道の築造に伴って発掘調査を行いました。今回の調査では、狭い調査範囲ながら奈良時代の住居跡などが多数検出され、古くから人々が生活した状況をうかがうことができました。残念ながら、現状のまでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進めることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和2年3月

前橋市教育委員会

教育長 塩崎政江

例 言

1. 本書は、前橋市による市道 00-360 号線（大胡 110 号線）道路築造に伴う天神風呂 N 地点遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査は前橋市（東部建設事務所）から委託を受け、前橋市教育委員会文化財保護課による指導のもと、山下工業株式会社（代表取締役 山下 尚）が実施し、その費用については事業者が全額負担した。
3. 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡所在地	群馬県前橋市茂木町 241、242-1
遺跡略称	III-1
遺跡番号	0191
調査面積	93m ²
期間 【現地調査】	令和元年 9月 20 日～令和元年 10月 10 日
【整理作業】	令和元年 10月 11 日～令和2年 1月 31 日
調査担当者	青木 利文（山下工業株式会社 文化財事業部）
調査監督員	並木 史一（前橋市教育委員会 文化財保護課 埋蔵文化財係 副主幹）
4. 整理作業及び本書作成は、青木を中心に石塚 久則・川邊 みずき・城 ゆかり・谷藤 龍太郎・福島 緑子（山下工業株式会社）が行った。
5. 遺構図作成は、田中 隆明（タナカ設計）が行った。
6. 本書の執筆については、第 I 章を並木が、第 II 章を石塚、第 III 章を青木、第 IV 章を城・谷藤、第 V 章を青木が行った。
7. 石器の実測は、山崎 芳春（文化財整理こうけん）が行った。
8. 発掘調査資料及び出土遺物は、一括して前橋市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の諸氏からご助言・ご協力を賜った。（五十音順・敬称略）

谷藤 保彦 山下 成信

凡 例

1. 遺跡、全体図における X・Y 値は、平面直角座標 IX 系（世界測地系）の座標値、挿図中の北は座標北である。
2. 本報告書で用いる座標値は、全て世界測地系測地成果 2011 である。
3. 遺物注記で用いる遺構等の略称は以下のとおりである。

【繩文土坑】	・・ J D	【竪穴建物】	・・ H	【土坑】	・・ D	【ピット】	・・ P	【溝】	・・ W
--------	--------	--------	------	------	------	-------	------	-----	------
4. 遺構図の網掛けについては、凡例を以下に明示した。

平面・断面図内	■ 燃土	■ 粘土	■ 遺物図内	■ 須恵器	■ 灰釉陶器
---------	------	------	--------	-------	--------
5. 本報告書で用いる遺跡図・遺構図・遺物実測図等の縮尺はすべてにスケールを表示した。
6. 本書掲載の第 1 図は前橋市発行の 1/2,500 「前橋市地形図」、第 2 図は国土地理院発行 1/25,000 地形图を用い、それぞれ一部改変引用した。
7. 土器の色調観察は『新版 標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所監修 2011）を用いた。

目 次

はじめに
例言
凡例
目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯.....	1
第Ⅱ章 周辺の地形と遺跡.....	2
第Ⅲ章 調査の概要.....	3
第Ⅳ章 確認された遺構と遺物.....	7
第Ⅴ章 まとめ.....	20

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第 1 図 天神風呂 N 地点遺跡 位置図	1
第 2 図 天神風呂 N 地点遺跡 周辺遺跡	2
第 3 図 基本解説.....	3
第 4 図 天神風呂 N 地点遺跡 全体図	5
第 5 図 JD - 1 平面・断面図及び出土遺物	7
第 6 図 JD - 1 出土遺物	8
第 7 図 JD - 2 平面・断面図及び出土遺物	9
第 8 図 JD - 3 平面・断面図及び出土遺物	9
第 9 図 縄文時代の遺構外出土遺物	10
第 10 図 H - 1 平面・断面図及び出土遺物	11
第 11 図 H - 2 平面・断面図及び出土遺物	12
第 12 図 H - 3 平面・断面図	13
第 13 図 H - 3 出土遺物	14
第 14 図 H - 4 平面・断面図及び出土遺物	15
第 15 図 H - 5 平面・断面図及び出土遺物	16
第 16 図 H - 6 出土遺物	16
第 17 図 H - 6 平面・断面図	17
第 18 図 土坑・ピット 平面・断面図	19
第 19 図 W - 1 平面・断面図	20
第 20 図 天神風呂遺跡群の各調査地点位置	21
第 21 図 天神風呂遺跡群内における 大型建物の分布図	21

挿表目次

第 1 表 作業経過.....	3
第 2 表 JD - 1 出土遺物観察表	8
第 3 表 JD - 2 出土遺物観察表	9
第 4 表 JD - 3 出土遺物観察表	10
第 5 表 遺構外出土遺物観察表	11
第 6 表 H - 1 出土遺物観察表	11
第 7 表 H - 2 出土遺物観察表	12
第 8 表 H - 3 出土遺物観察表	14
第 9 表 H - 4 出土遺物観察表	15
第 10 表 H - 5 出土遺物観察表	16
第 11 表 H - 6 出土遺物観察表	17
第 12 表 天神風呂遺跡群の時期	21

写真図版目次

図版 1	1. 調査区全景 南から	図版 4	1. H - 4 完掘 南から 2. H - 5 完掘 南から 3. H - 6 完掘 西から 4. H - 6 断方 完掘 北西から 5. H - 6 P 1 - P 2 完掘 南から 6. D - 1 完掘 南から
図版 2	1. JD - 1 完掘 南から 2. JD - 1 遺物出土状況 南から 3. JD - 2 完掘 南から 4. JD - 3 完掘 南西から 5. H - 1 完掘 南から 6. H - 2 完掘 西から 7. H - 3 完掘 西から	図版 5	1. D - 5 セクション 西から 2. D - 8 + 7 + 6 完掘 東から 3. D - 8 + 9 完掘 南から 4. D - 10 完掘 東から 5. D - 11 完掘 南から 6. D - 12 完掘 南から 7. D - 13 完掘 南から 8. D - 14 完掘 東から
図版 3	1. H - 3 遺物出土状況 南から 2. H - 3 カマド 完掘 西から 3. H - 3 P 1 完掘 西から 4. H - 3 P 2 完掘 西から 5. H - 3 P 3 完掘 東から 6. H - 3 極方 完掘 北西から	図版 6	出土遺物 (JD - 1 ~ 3)
		図版 7	出土遺物 (縄文時代の遺構外、H - 1 ~ 6)

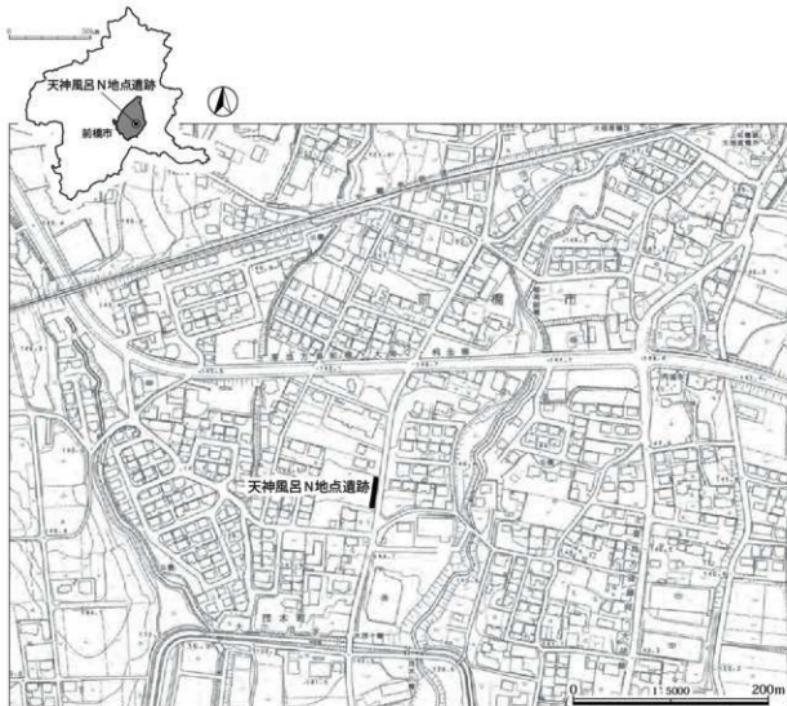
第Ⅰ章 調査に至る経緯

調査に至る経緯

市道 00 - 360 号線（大胡 110 号線）道路築造にあたり、令和元年 8 月 5 日付で前橋市長 山本 龍（東部建設事務所）（以下「前橋市」という）より試掘確認調査依頼が提出された。これを受け、前橋市教育委員会（以下「市教委」という）で同年 8 月 16 日に試掘確認調査を実施した結果、竪穴建物跡などが検出され、工事計画から造構の現状保存は困難であると判断したため、記録保存を目的とした発掘調査実施に向けて協議を進めた。

令和元年 8 月 27 日付で前橋市より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が市教委に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。同年 9 月 17 日付で前橋市と民間調査組織である山下工業株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「天神風呂 N 地点遺跡」（遺跡コード：1111）の「天神風呂」は近接地点でこれまで実施した発掘調査の遺跡名を採用し、「N 地点」は過年に実施した調査と区別するために付したものである。



第1図 天神風呂 N 地点遺跡 位置図

第Ⅱ章 周辺の地形と遺跡

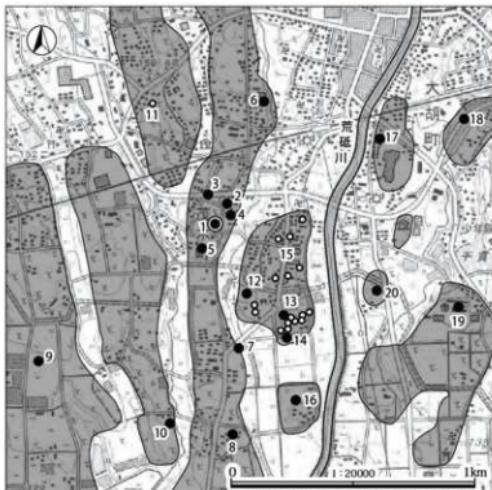
1. 遺跡の位置

前橋市の大胡地区は前橋市街から北東約9kmにある。立地は赤城山南麓で、平地部に向かって流れる中小の河川により開析された谷地形により起伏の多い地形となり、標高は120m～250mとなる。調査地点の茂木町は大胡の中心街から南西約1kmにあり、市街の中央を北から貫流する荒砥川の支流で東を流れる薬師川と西の大泉坊川に挟まれ、両側の低地部には小規模な水田地帯が続く。現況は北側に県道3号線(通称大胡県道)、南東は住宅地となっている。

2. 周辺の遺跡

本遺跡の周辺は開発に伴う小規模な発掘調査が進み、旧石器時代から中世・近世までの遺跡が確認されている。旧石器時代の遺跡は三ツ屋遺跡(7)で相沢忠洋が発掘調査した遺跡として有名である。天神風呂遺跡(3)(大胡バイパス)は縄文時代の集落、鬼高期～国分期の集落が調査されている。さらに周辺開発に伴い天神風呂H・I・E・F地点遺跡(4・5)の調査が実施され、台地全面に遺跡が広がる状況が確認されている。上大屋・樋越地区遺跡群(18)は縄文時代集落の他、八ヶ峰生産址遺構からは奈良時代の須恵器窯跡や炭窯や製鉄跡が出土している。茂木古墳群(15)は上ノ山遺跡(13)を中心とする古墳時代後期を中心とした大規模な古墳群である。堀越古墳(11)は終末期の円墳で、主体部には切石切組式の高度な横穴式石室を構築している。学史的には、昭和32年に群馬大学史学研究室により鎌倉時代末の茂木古墓(14)が調査されている。特に注目されることは天神風呂遺跡群では瓦塔片が複数確認されていることや、天神風呂F地点(5)から復元可能な淨瓶が出土していることで、本遺跡周辺に古代官衙遺構の存在が推定される。

- 1 天神風呂N地点遺跡
- 2 天神風呂M地点遺跡
- 3 天神風呂遺跡(大胡バイパス)
- 4 天神風呂H・I地点遺跡
- 5 天神風呂E・F地点遺跡
- 6 茂木天神遺跡
- 7 三ツ屋遺跡
- 8 大畠遺跡
- 9 足軽グランド遺跡
- 10 稲荷窪遺跡
- 11 堀越古墳
- 12 西小路遺跡
- 13 上ノ山遺跡
- 14 茂木古墓
- 15 茂木古墳群
- 16 茂木山ノ前遺跡
- 17 中宮遺跡
- 18 上大屋・樋越地区遺跡群
- 19 前橋東商業高等学校遺跡
- 20 下宮遺跡



第2図 天神風呂 N 地点遺跡 周辺遺跡

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の方法

本遺跡地は道路の拡幅工事であるため、南北に細長い調査区（93m）となった。調査区範囲は耕作地であり、開発はほとんど行われていない。現在の市道00-360号線（大胡110号線）は1車線の道路であるが、生活道路であるため交通量が多く、すれ違いも頻繁である。このため、調査中は道路面に安全柵を設置し、点滅灯を灯火した。

遺構調査は、I層およびII層（耕作土）を重機により除去し、ローム面を確認面とした。遺構確認は人力で行い、調査区全域で竪穴建物跡、土坑、溝などが確認できた。遺構掘削はジョレンやスコップ、移植ごてを用い、半裁やベルトを残して掘削を進めた。遺構は古代の竪穴建物跡や土坑のほか、縄文時代の土坑が確認できた。なお、縄文時代の遺構名称は、先頭に「J」を追加し古代の遺構と分けた。

測量の座標は世界測地系を用い、X=45624 Y=61144を起点とし、南東に展開する4mのグリッドを設定した。遺構記録は平面図・断面図はトータルステーションと電子平板を用い作成した。遺構写真は35mmモノクロ、カラーポジフィルム、およびデジタルカメラを使用した。遺構掘削の完了後には高所より、南北からの全景撮影を行った。

2. 調査の経過

調査は令和元年9月20日～10月10日まで実施した。詳細は下記の表に示した。

第1表 作業経過

作業内容	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
事前準備																		
看板・安全柵																		
表土剥離																		
遺構確認																		
遺構掘削																		
遺構記録																		
清掃・全景撮影																		
完了立合い																		
埋め戻し																		
後片付け																		

3. 調査区の地形と基本層序

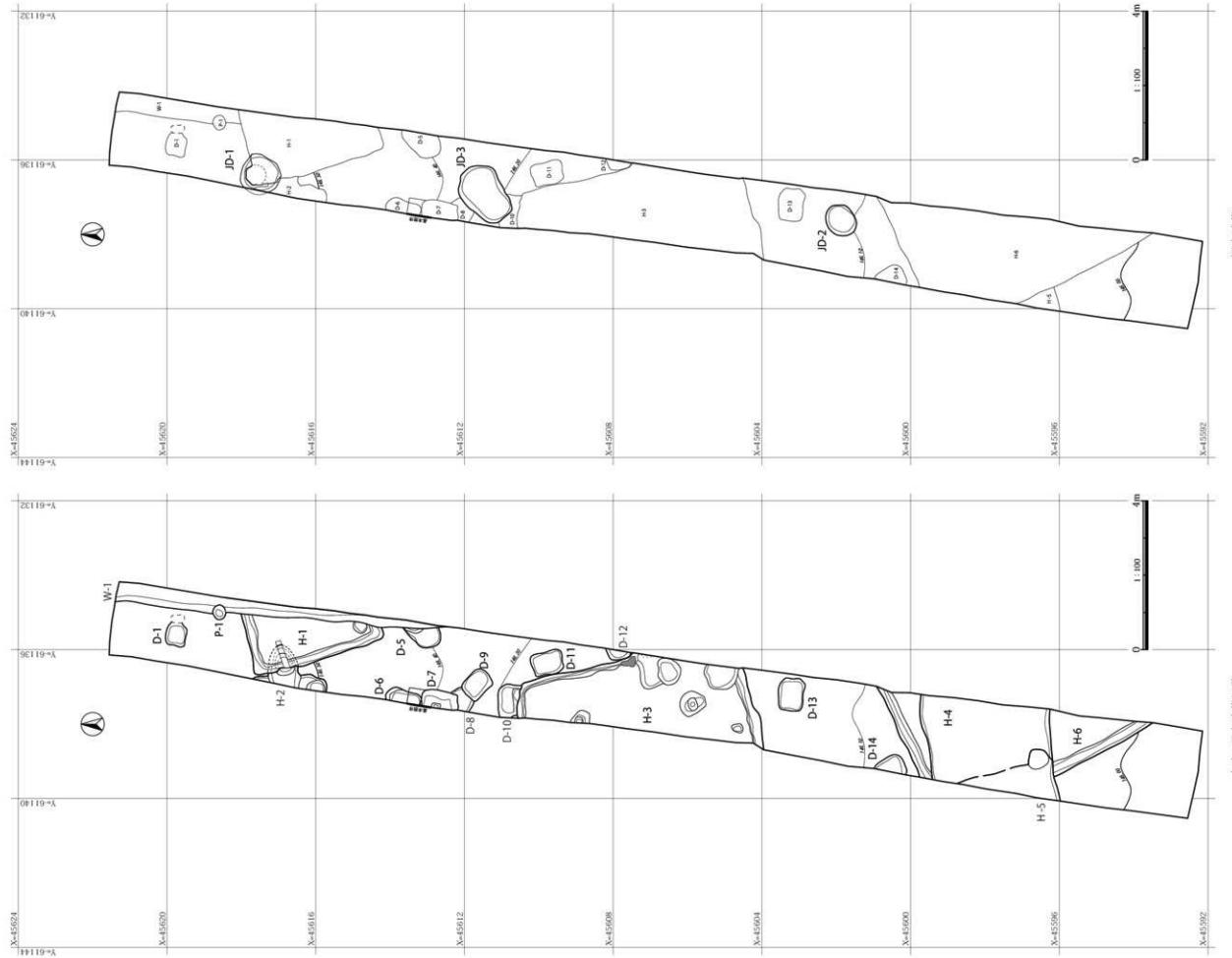
本遺跡は基本的に平坦で、北から南に緩やかに傾斜している。遺構確認面はI・II層（耕作面）を除去したIII層（ローム面）上面である。しかしながら、ローム層の上面にはYPは含まれておらず、本来の地形を削平した可能性が高い。なお、III層上面から40cm程度BPを含むV層となる。

基本土層

- I 表土、現在の耕作土。
- II 旧耕作土、ロームブロックを含む。
- III ローム層、黄褐色、しまりあり。
- IV ローム層、にぶい黄褐色、しまりあり。白色軽石粒を含む。
- V ローム層、にぶい黄褐色、しまりあり。BPを含む。
- VI ローム層、にぶい黄褐色、しまりやや弱い。粘性あり。
- VII ローム層、暗褐色、暗色帶、しまりあり。粘性あり。



第3図 基本層序



第4図 天神風呂門地點遺跡 全体図

奈良・平安朝代以降

縄文時代

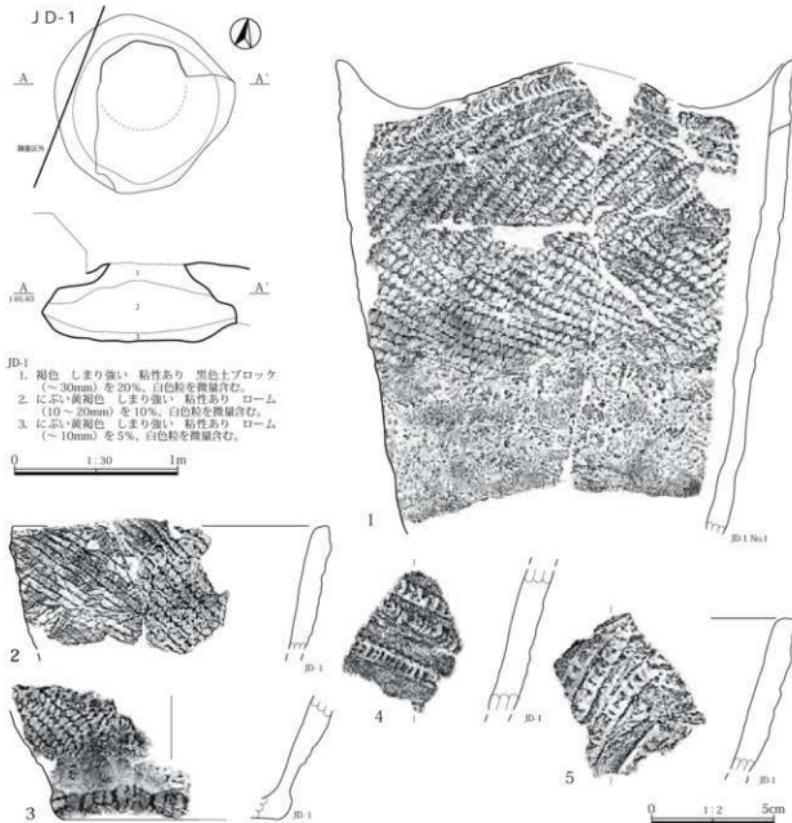
第IV章 確認された遺構と遺物

1. 繩文時代の遺構と遺物

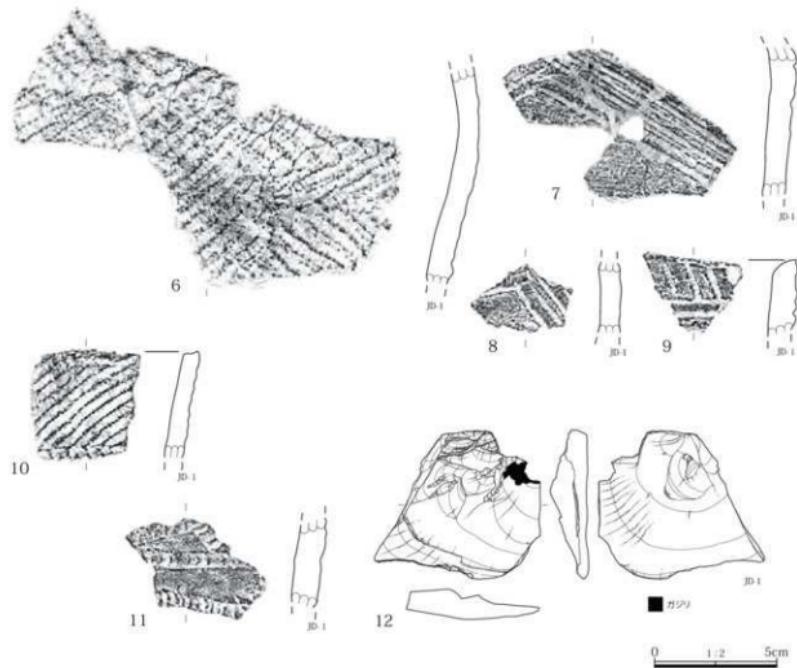
縄文時代の遺構とした土坑（JD）は3基が確認されている。この内1基はフラスコ状の土坑となる。出土する遺物は縄文土器や石器があり、時期は縄文時代前期中葉に該当するものと考えられる。なお同時期の遺物は古代の遺構からも出土しているが、これらは縄文時代の遺構外出土遺物として取り扱った。

JD - 1

調査区の北にある。南東の大部分をH-1に、南をH-2に切られている。遺構底部の西は調査区外となる。遺構の平面形状は円形であるが、上端よりも下端の方が直径が大きくなるフラスコ状土坑である。上端は残存値で幅51cm、下端は概ね幅110cm程度となり、残存深度は47cmである。出土遺物は黒浜式土器の深鉢のほか、有尾式的土器片と石器である。時期は出土遺物から縄文時代前期中葉の遺構と考えられる。



第5図 JD-1 平面・断面図及び出土遺物



第6図 JD-1 出土遺物

第2表 JD-1 出土遺物観察表

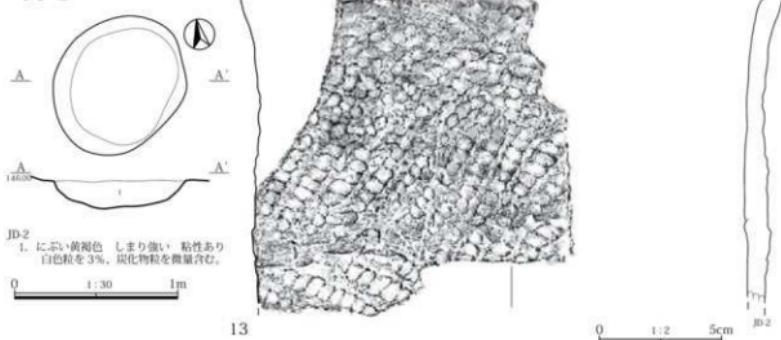
No.	出土	種別	器種	部位	胎土	文様の特徴	時期
1	覆土	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	粗砂・小礫 織維	口縁は4方向に突出した形状となる。口縁に平行して竹賀文が施されており、以下の上半部2/3までは單面LRとRLの羽状織文となる。下部は筒文。織文を削除した後、竹賀文の下に平行する弦線を1条過らせている。黒浜式	前期中葉
2	覆土	縄文土器	小型深鉢	口縁部分	粗砂・織維	口縁端部から單面RLの羽状織文が施されている。口縁部は内側し舟形で撫たぬがある。黒浜式	前期中葉
3	覆土	縄文土器	深鉢	底部片	粗砂・小礫 織維	底部にはRLの単節織文が見られるが、底に近い部分は筒文。底部横断面に籠目状の棒状突起がある。黒浜式	前期中葉
4	覆土	縄文土器	深鉢	破片	粗砂・小礫	山形の3条の連續爪形文を確認できる。丁寧に施文されている。有尾式	前期中葉
5	覆土	縄文土器	深鉢	口縁部分	粗砂・織維	4方向に突起を持つ深鉢の口縁部か？山形の4条の爪形文が施される。有尾式	前期中葉
6	覆土	縄文土器	深鉢	胴部片	粗砂・織維	19と同一側体。単面LRとRLの羽状織文で、施文方法や胎土、焼成が酷似している。黒浜式	前期中葉
7	覆土	縄文土器	深鉢	破片	粗砂・織維	4方向に突起を持つ深鉢の口縁に近い部分片か？山形の弦線文が施されている。有尾式	前期中葉
8	覆土	縄文土器	不明	破片	粗砂	山形の弦線文が施されている。有尾式	前期中葉
9	覆土	縄文土器	不明	口縁部分	粗砂・織維	口縁部に摩耗状工具による剝突文がある。口縁上部には筒文が施され、その下には2本の横縞が施される。口縁部は内側に斜削している。有尾式	前期中葉
10	覆土	縄文土器	小型深鉢	口縁部分	粗砂・織維	筒文は摩滅し文は定かではない。口縁端部より單面LRの織文が施され、下部は結構束縛文となる。黒浜式	前期中葉
11	覆土	縄文土器	不明	破片	粗砂	山形・横幅の連續爪形文が施文されている。有尾式	前期中葉

No.	出土	種別	器種	石材	長さ・幅・厚さ(cm)・重量(g)	形態・特徴
12	覆土	石器	スクレーパー	安山岩	6.1・5.5・15・41.588	石材削片末端に連続かつ急角度な二次加工あり

JD - 2

調査区の中央南にある。遺構の形状は不整円形である。長軸 90cm、短軸 76cm、深度は 17cm である。出土遺物は黒浜式土器の口縁～胴部片。時期は出土遺物から縄文時代前期中葉と考えられる。

JD - 2



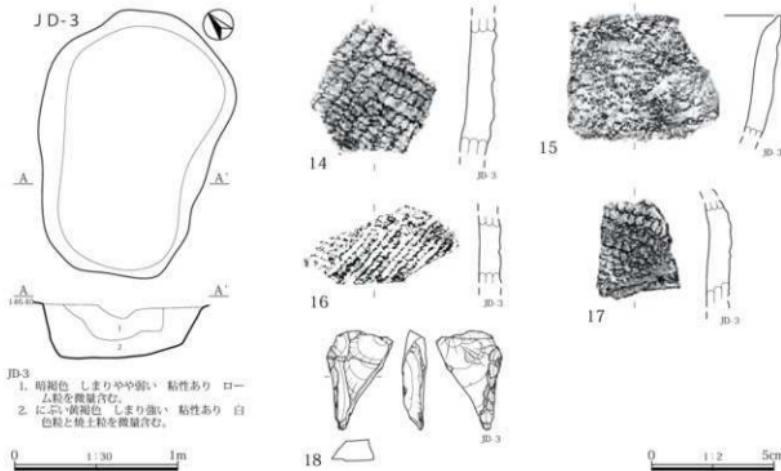
第7図 JD - 2 平面・断面図及び出土遺物

第3表 JD - 2 出土遺物観察表

No.	出土	種別	器種	部位	胎土	文様の特徴	時期
13	覆土	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	粗砂・織維	単筋LRとRDによる羽状織文。縄の折り返し部分には、陰帯を付けて上から撒けたような痕跡がある。黒浜式	前期中葉

JD - 3

調査区の中央北にある。遺構の北西に D - 8、南は D - 10 に切られている。遺構の形状は不整形である。長軸 162cm、短軸 117cm、深度は 33cm である。出土遺物は、有尾式・黒浜式の土器片と石器である。時期は出土遺物から縄文時代前期中葉と考えられる。



第8図 JD - 3 平面・断面図及び出土遺物

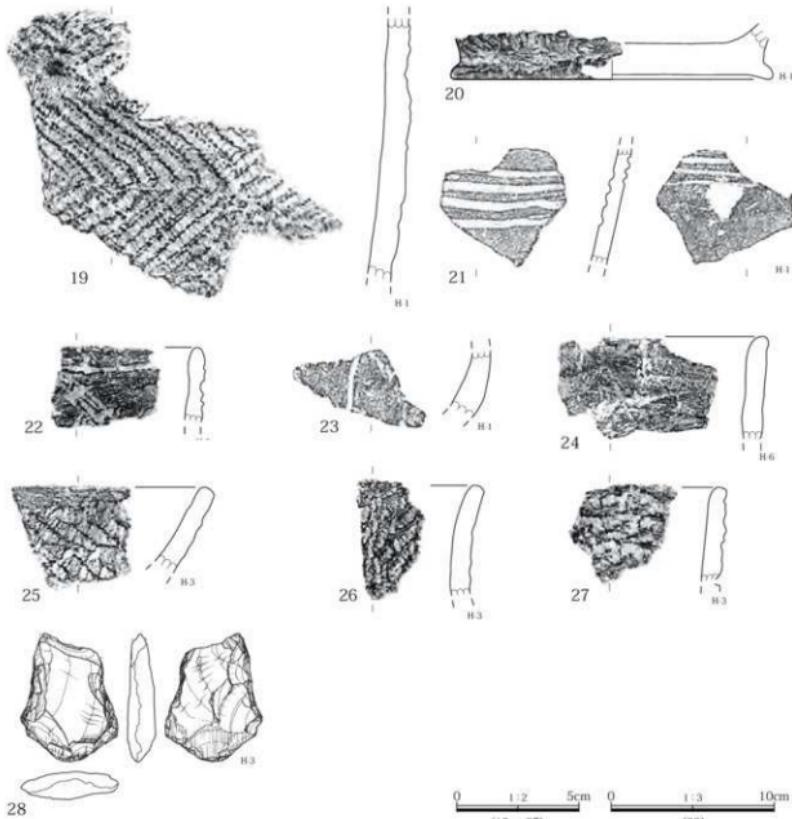
第4表 JD・3出土遺物観察表

No.	出土	種別	器種	部位	胎土	文様の特徴	時期
14	覆土	縄文土器	深鉢	側部片	粗砂	単節LRとRLの縄文が施される。有尾式	前期中葉
15	覆土	縄文土器	深鉢	口縁部片	粗砂・小礫	荒れた器面に單節LRの縄文が見られる。他は先の細い工具で横に引っ張ったような線が削除される。口縁部は外側は平坦だが、内面は凹凸し先端は腹を指すてつまみ跡のような形狀をしている。型底式か?	前期中葉か?
16	覆土	縄文土器	深鉢	側部片	粗砂・織維	表面は摩減し縄文は見え難いが、単節RLとRLの縄文が確認できる。有尾式	前期中葉
17	覆土	縄文土器	深鉢	側部片	粗砂・織維	表面は大分摩減している。地文は単節RL。縄文の下部には沈線が横方向に走行し、文様を区画した跡かと思われる。有尾式	前期中葉

No.	出土	種別	器種	石材	長さ・幅・厚さ(cm)・重量(g)	形態・特徴
18	覆土	石器	石錐未成品	黒色頁岩	3.9・2.4・0.9・9.12	一側面に内面調整がある。先端は尖頭状となる

縄文時代の遺構外出土遺物

縄文土坑（JD）以外の遺構から出土した縄文土器片や石器が数点確認された。なお、19はJD-1の6と同一品の可能性があり、JD-1の遺物であったとみられる。



第9図 縄文時代の遺構外出土遺物

第5表 遺構外出土遺物観察表

No.	出土	種別	器種	部位	胎土	文様の特徴	時期
19	覆土	縄文土器	深鉢	脚部片	粗砂・織維	単節LRとRLの羽状網文が施されている。6と同一個体。黒浜式	前期中葉
20	覆土	縄文土器	深鉢	底部片	粗砂・織維	底面の側面には強い単節網文が押しつけられている。底部裏面にはみがきが施されている。底部の形状から防護壁に使用された深鉢と考えられる。称名寺式か?	後期か?
21	覆土	縄文土器	不明	破片	織維	内外面が研磨されている。外面には3条以上、内面には4条の沈線が見られる。	後期中葉
22	覆土	縄文土器	小型深鉢	口縁部片	粗砂・織維	口縁部に1条の沈線がある。下部には山形の沈線が見られる。口縁部は外側下方に傾斜する。有尾式	前期中葉
23	覆土	縄文土器	不明	破片	粗砂	稱名寺式で新しい段階の、曲線の沈線を持つ。	後期
24	覆土	縄文土器	深鉢	口縁部片	粗砂・小礫・織維	上半部は織維土器の無文部を残す。下半部には単節RLの網文が見られる。口縁部はわざに外側に傾斜している。黒浜式	前期中葉か?
25	覆土	縄文土器	小型深鉢	口縁部片	粗砂・織維	口縁部より斜行する単節RLの網文が確認できる。黒浜式	前期中葉
26	覆土	縄文土器	小型深鉢	口縁部片	粗砂・織維	地文は単節LR。口縁部はやや外反している。黒浜式	前期中葉
27	覆土	縄文土器	小型深鉢	口縁部片	粗砂・織維	土器表面の織維痕や網文の摩滅により文様は不明瞭だが、口縁の紐い単節LRで施されている。黒浜式か?	前期中葉か?
石器							
No.	出土	種別	器種	石材	長さ・幅・厚さ(cm)・重量(g)	形態・特徴	
28	覆土	石器	石斧	ホルンフェルス	7.9・5.9・1.7・7881	先端に摩耗あり	

2. 奈良・平安時代以降の遺構と遺物

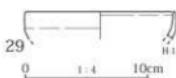
古代の遺構は竪穴建物、土坑、ピットが確認されている。このほかに溝が1条確認できたが、近世以降の新しい遺構とみられる。出土遺物は、竪穴建物からは土師器、須恵器、金属製品などがある。土坑、ピット、溝からの出土遺物はない。

竪穴建物

古代の竪穴建物は6軒が確認されているが、調査範囲が狭いため、遺構全体が確認できたものはない。なおH-1とH-2、H-4・5・6がそれぞれ切り合う。

H-1

本遺構は調査区の北にある。遺構の東は調査区外となる。主軸はN-75°-Eで、規模は南北が3.6m、東西が残存値で2.1m、壁高は25cmとなる。本遺構の西にあるH-2に切られている。カマドは確認されていない。ピットは南隅に1基が確認でき、深さは12cmとなる。貯蔵穴は確認されていない。床面は貼り床となっており、壁周溝がめぐっている。出土遺物は、土師器の环の小片などがある。時期は出土遺物から7世紀後半～8世紀代と考えられ、切り合い関係からH-2より古い遺構となる。



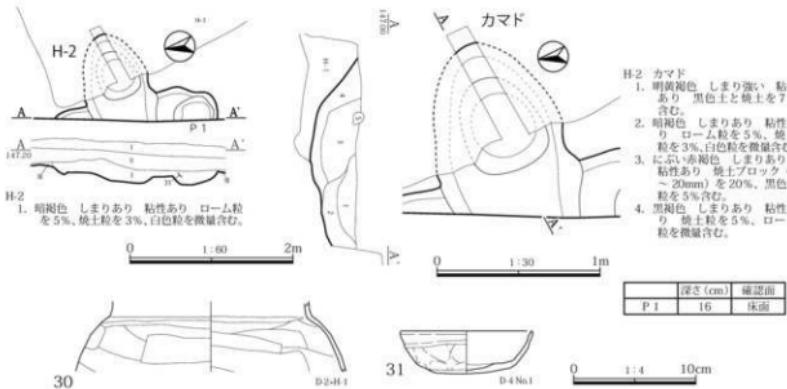
第10図 H-1 平面・断面図及び出土遺物

第6表 H-1出土遺物観察表

No.	出土	種別	器種	部位	口径・底径・高さ	焼成	胎土	調整	備考
29	覆土	土師器	环	口縁部片	<(12.2)--->(2.3)	良好	粘土 角閃石	良好。長石・外側 口縁部横ナデ 内側 横ナデ	()は残存値、()は推定値

H - 2

本遺構は調査区の北にある。調査ではD - 2、D - 3、D - 4というそれぞれ独立した土坑として掘削を行ったが、焼土が集中したことなどから、調査終了後にこれらをまとめて竪穴建物とした。カマドを含む遺構東部が確認でき、西は調査区外となる。主軸はN-72°-Eで、規模は残存値で南北が1.1m、東西が1.2mとなる。本遺構の東にあるH - 1を切っている。カマドは東壁に付設されており、残存値で1.2mとなる。貯蔵穴は南東隅にP 1が確認できた。遺構のほとんどが調査区外となる。壁周溝は確認できない。出土遺物は、土師器の壺と甕の胸部などがある。時期は出土遺物から9世紀代の遺構と考えられ、切り合い関係と出土遺物の特徴から、H - 1より新しい遺構と考えられる。



第11図 H - 2 平面・断面図及び出土遺物

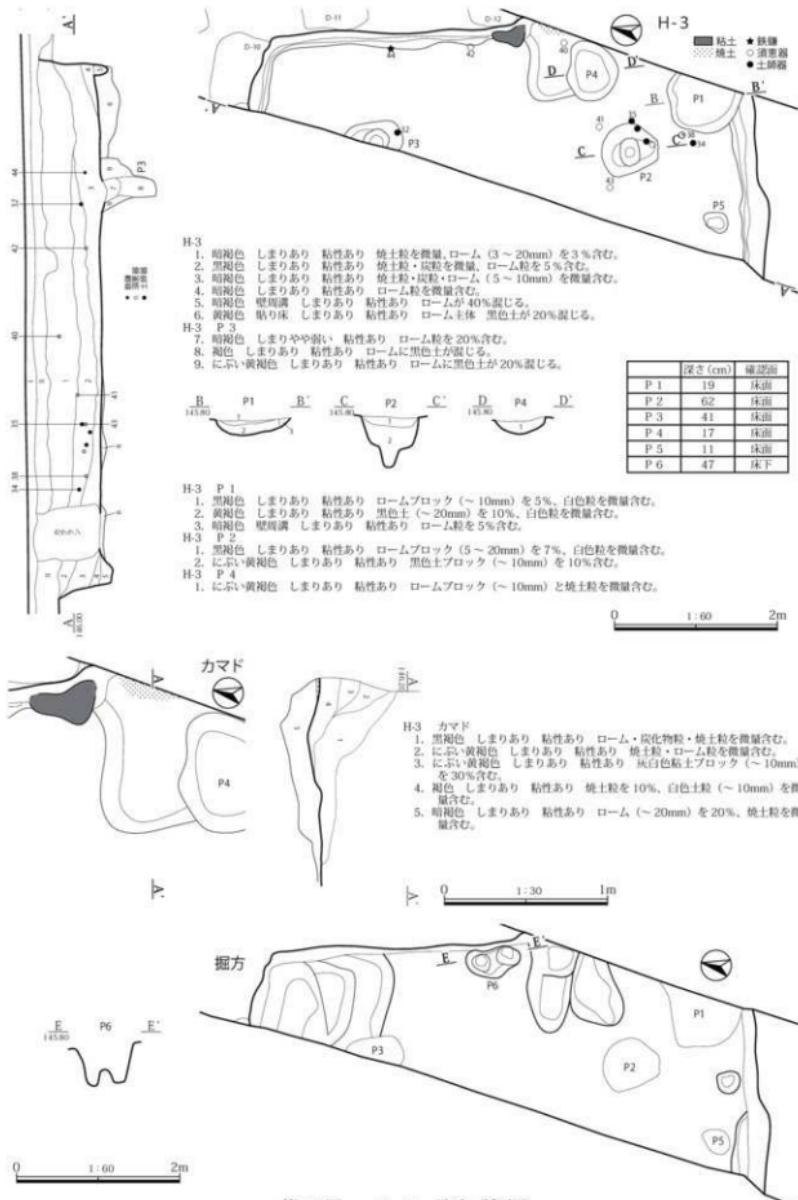
第7表 H - 2出土遺物観察表

No.	出土	種別	器種	部位	口径・底径・高さ	焼成	色調	胎土	調整	備考
30	覆土	土師器	甕	頭～胴部 1/4	—～(5.8)	良好	褐色	良質。長石・黒色砂粒	外側 ヘラケズリ 内面 ヘラナヂ	
31	覆土	土師器	壺	口縁～底部 1/4	(10.8)～3.5	良好	褐色	長石・石英・角閃石。黒色・赤褐色の小礫を含む	外側 上半部横ナデ、中間部擦オサエ。 下半部ヘラケズリ 内面 上半部横ナデ、下半部ナヂ	

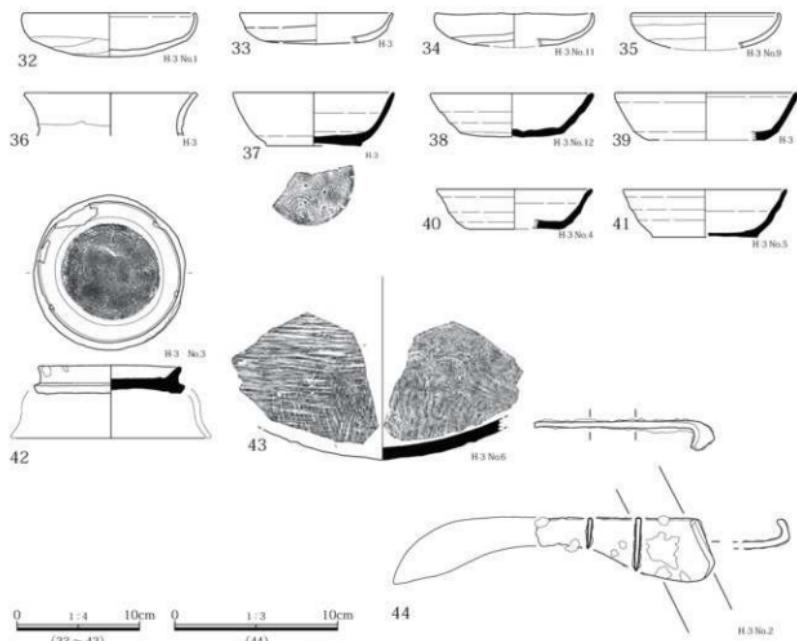
() は残存値、< > は推定値

H - 3

本遺構は調査区の中位にある。遺構の西と東は調査区外となる。主軸はN-79°-Eで、規模は残存値で南北が6.2m、東西が2.1m、壁高は75cmとなる。本遺構の北にあるD - 10と重複しているが切り合い関係は不明。カマドは東壁の南寄りに付設されているが、大半は調査区外となる。カマドの焚口部幅は推定で70～80cm、袖は粘土で構築されている。焚口部の底面はやや窪み、燃焼部底面には一部焼土が見られる。ピットは6基確認でき、このうちP 1は長軸90cm、短軸60cm、深さ19cmで、カマドの南東に位置していることから貯蔵穴と考えられる。P 2とP 3は柱穴と考えられる。床面は貼り床となっており、壁周溝がめぐっている。掘方掘削のため袖を外した後に床下ピット(P 6)が確認できた。出土遺物は土師器・須恵器の壺、鉄鎌、転用硯などがある。時期は出土遺物から8世紀後半の遺構と考えられる。



第12図 H-3 平面・断面図



第13図 H-3 出土遺物

第8表 H-3出土遺物観察表

No.	出土	種別	器種	部位	口径・底径・高さ	焼成	色調	胎土	調整	備考
32	覆土	土師器	环	口縁～底部 1/4	（13.8）・…・3.6	良好	褐色	良好。長石	上面 横模ナメ、下半部ヘラケズリ 内面 上半部模ナメ、下半部ナマ	
33	覆土	土師器	环	口縁～底部 1/5	（12.4）・…・（2.3）	良好	褐色	良好。長石	外面 ヘラケズリ 内面 指ナマ	
34	覆土	土師器	环	口縁～底部 1/3	（12.8）・…・（2.6）	良好	褐色	良好。長石・ 石英・角閃石	外面 ヘラケズリ 内面 指ナマ	
35	覆土	土師器	环	口縁～胴部 1/8	（12.0）・…・（2.8）	良好	褐色	良好。長石・ 石英・角閃石	外面 ヘラケズリ 内面 指ナマ	表面は荒れて いる
36	覆土	土師器	甕	口縁部1/5	（13.8）・…・（3.5）	良好	明赤褐色	良好。長石・ 石英	外面 ヘラケズリ 内面 指ナマ	
37	覆土	須恵器	环	1/4	（13.2）・7.8・4.4	良好	灰白色	良好。角閃石	底面削輪糸切り（右回転） 外側 口クロナマ	
38	覆土	須恵器	环	3/4	13.4・8.4・3.6	良好	灰色	良好。長石・ 角閃石	底面ヘラケズリ後口クロナマ	
39	覆土	須恵器	环	口縁～底部 1/5	（14.8）・（9.6）・3.9	良好	灰白色	良好。長石・ 角閃石	外側 口クロナマ形、底面削輪ヘラケズリ 内面 口クロナマ	
40	覆土	須恵器	环	1/3	12.8・7.4・3.3	良好	灰色	良好。長石・ 角閃石	外側 口クロナマ形、底面削輪ヘラケズリ 内面 口クロナマ	
41	覆土	須恵器	环	1/5	（13.4）・8.4・3.9	普通	灰褐色	良好。石英・ 色粘土粒子	外側 口クロナマ、底面削輪ヘラケズリ 内面 口クロナマ	
42	覆土	須恵器	転用甕	底部～高台	…・10.8・（2.2）	不良	黄褐色	長石・赤褐色	貼付高台 内面 口クロナマ	骨被器を転用 か。転用面に 摩耗あり
43	覆土	須恵器	甕	底部片	…・…・…	良好	灰色	良好。長石	外側 文様は長楕方向に直線的 内面 当て木目使用	

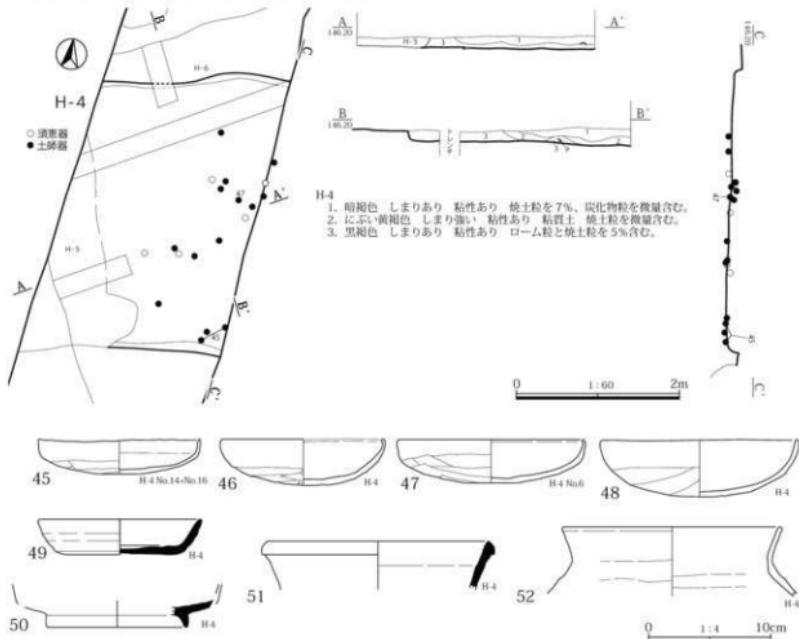
() は残存値、(<) は推定値

金属製品

No.	出土	種別	器種	部位	長さ (cm)・重量 (g)	備考
44	覆土	鉄製品	鍔	刃1/2	（11.2）・（56.0）	折り返し鍛錬痕あり。斜行着柄

H - 4

本遺構は調査区の南にある。主軸はN-8°-Wで、規模は残存値で南北が3.4m、東西が2.4m、壁高は10cmとなる。本遺構はH-6より新しく、ほぼ上位に作られた。西のH-5に切られている。カマドは確認されていない。貯蔵穴およびピットは確認されていない。床面は不明瞭で、壁周溝などは確認されていない。出土遺物は土師器・須恵器の壺、甕の口縁部などがある。時期は出土遺物から8世紀後半の遺構と考えられ、切り合い関係からH-6より新しく、H-5より古い遺構となる。



第14図 H-4 平面・断面図及び出土遺物

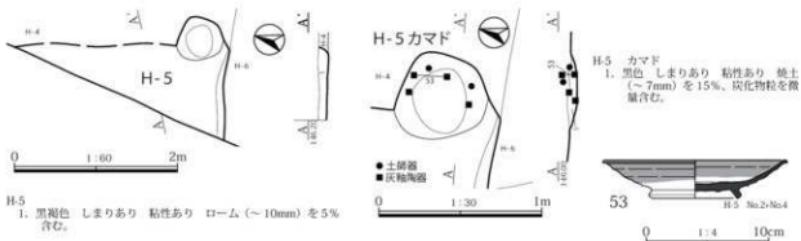
第9表 H-4 出土遺物観察表

No.	出土	種類	器種	部位	口径・底径・高さ	焼成	色調	胎土	調整	備考
45	覆土	土師器	壺	2/3	13.2×…×2.9	良好	褐色	良好、長石・角閃石	外側 ヘラケズリ	
46	覆土	土師器	壺	3/4	13.4×…×3.8	良好	褐色	良好、長石・角閃石	内側 ナデ	
47	覆土	土師器	壺	2/3	15.0×…×3.4	良好	褐色	良好、長石・角閃石	外側 下半部ヘラケズリ	
48	覆土	土師器	壺	3/4	15.8×…×4.7	良好	褐色	良好、長石・角閃石	内側 上半部穢ナデ、下半部ヘラケズリ	
49	覆土	須恵器	壺	口縁～底部 1/4	13.2×9.0×2.9	不良	灰黄色	良好、長石・角閃石、小礫を含む	外側 ロクロナデ、底部ヘラ切り 内側 ロクロナデ	
50	覆土	須恵器	壺	底部～高台片	—×11.4×(2.2)	良好	褐灰色	良好、長石・角閃石	外側 ロクロナデ 内側 ロクロナデ	
51	覆土	須恵器	甕	口縁部1/8	(18.2)×…×(4.0)	良好	褐灰色	良好、長石・角閃石	外側 ロクロナデ、口部折り返し？ 内側 ロクロナデ	
52	覆土	土師器	甕	口縁～肩部 1/5	(17.8)×…×(5.7)	良好	褐色	良好、長石・角閃石	外側 ヘラケズリ 内側 ナデ	

() は残存値、(<) は推定値

H - 5

本遺構は調査区の南にある。遺構の西側が調査区外となる。主軸はN-75°-Eで、規模は残存値で南北が2.6m、東西が1.4m、壁高は5cmとなる。本遺構の東部にあるH - 4とH - 6を切っている。カマドは北東隅に付設されており、全長は残存値で55.4cm、焚口部幅は残存値で63cmとなる。燃焼部底面には一部焼土が見られる。ピットおよび貯蔵穴は確認されていない。床面は貼り床となり、壁周溝は確認されていない。出土遺物は灰釉陶器がある。出土遺物から10世紀代の遺構と考えられ、切り合い関係からH - 4、H - 6より新しい遺構となる。



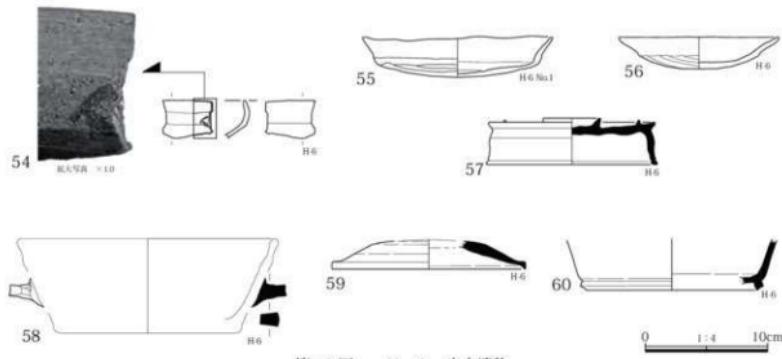
第15図 H - 5 平面・断面図及び出土遺物

第10表 H - 5 出土遺物観察表

No.	出土種別	種別	器種	部位	口径・底径・高さ	地成	色調	胎土	調整	備考
53	覆土	灰釉陶器	皿	2/3	(14.8)・(6.8)・3.2	良好	灰白色	良好	外面 ロクロ形成、底面削除 内面 ロクロナデ	10世紀代、L1 層部の内外面 に灰釉がかかる ()は残存値、< >は推定値

H - 6

本遺構は調査区の南にある。遺構の東側と北西は調査区外となる。主軸はN-28°-Eで、規模は残存値で南北が6.4m、東西が4.4m、壁高は48cmとなる。本遺構の北西にあるH - 4とH - 5に切られている。ピットは1基を確認するが、貯蔵穴は確認されていない。床面は貼り床となっており、壁周溝がめぐっている。カマドは確認されていない。掘方掘削時に北東に床下ピットが確認できた。出土遺物は墨書き土器の小片、土師器・須恵器の片、須恵器の蓋、双耳环の把手などがある。時期は出土遺物から8世紀中頃の遺構と考えられ、切り合い関係からH - 4、H - 5よりも古い遺構となる。

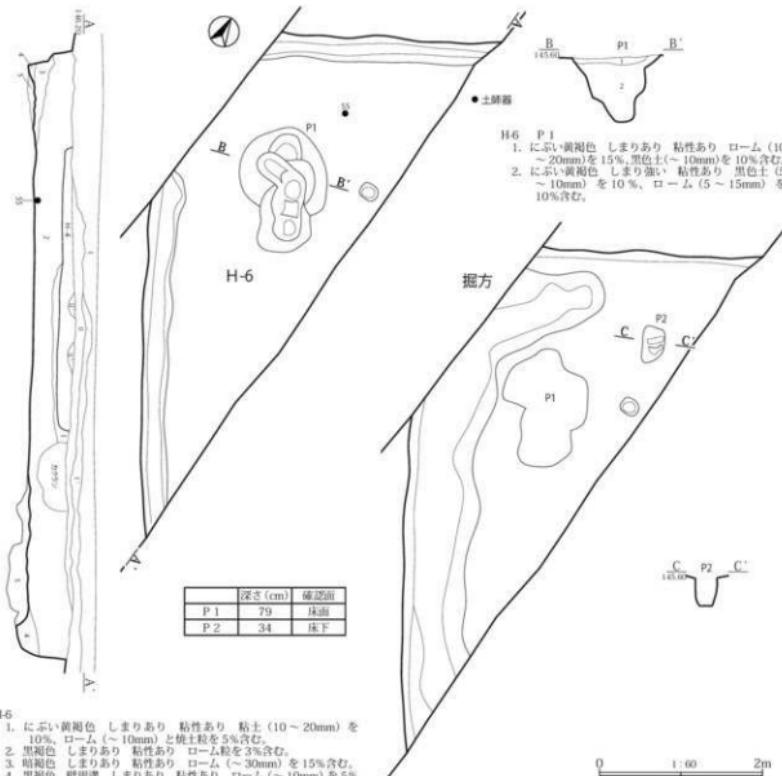


第16図 H - 6 出土遺物

第11表 H-6出土遺物観察表

No.	出土	種別	器種	部位	口径・底径・器高	焼成	色調	胎土	調整	備考
54	覆土	土師器	环	口縁～胴部片	—・—・(3.1)	良好	灰褐色	良好。長石・角閃石	口縁部横ナデ。下半部ヘラケズリ	埋土器（文字は判読不能）
55	覆土	土師器	环	1/2	(15.6)・—・3.3	良好	褐色	良好。長石・石英・角閃石	ヘラケズリ 茹ナデ	
56	覆土	土師器	环	口縁～底部 2/3	(13.0)・—・2.6	良好	褐色	良好。長石・石英・角閃石	上半部横ナデ。下半部ヘラケズリ 上半部横ナデ。下半部ナデ	
57	覆土	須恵器	蓋	2/3	14.0・—・3.8	良好	黄褐色	良好	外側 ロクロナデ 内側 ロクロナデ	
58	覆土	須恵器	環耳杯	把手	—・—・(2.4)	良好	灰白色	良好。長石・角閃石	外側 ヘラケズリ 内側 茹り付け	
59	覆土	須恵器	蓋	1/5	(15.8)・—・(2.3)	良好	灰色	長石	外側 ロクロ成形 内側 ロクロ成形	
60	覆土	須恵器	环	胴～高台 1/8	—・(14.0)・(4.2)	良好	灰色	良好。長石・石英・角閃石	外側 ロクロナデ 内側 ロクロナデ	外側に自然釉付着。貼付高台

() は残存値。< > は推定値



第17図 H-6 平面・断面図

土坑・ピット

土坑 11 基、ピット 1 基が確認された。確認された土坑とピットから出土した遺物はないが、覆土は竪穴建物と類似しているため、おおむね古代の遺構と考えられる。

D - 1

本遺構は調査区の北にある。遺構の東はカクランに切られる。平面形状は長方形である。残存値で長軸 63cm、短軸 54cm、深度は 10cm である。

D - 5

本遺構は調査区の中央北にある。遺構の上端は W - 1 により切られる。遺構の東は調査区外となるが、平面形状は梢円形と想定される。残存値で長軸 105cm、短軸 73cm、深度は 32cm である。

D - 6

本遺構は調査区の中央北にある。遺構の西は調査区外となり、南を D - 7 に切られているため、平面形状は判然としない。残存値で長軸 96cm、短軸 38cm、深度は 29cm である。覆土は 2 層確認できた。

D - 7

本遺構は調査区の中央北にある。南の D - 8 と北の D - 6 を切っている。遺構の西は調査区外となるが、平面形状は長方形と想定される。残存値で長軸 103cm、短軸 49cm、深度は 117cm である。

D - 8

本遺構は調査区の中央北にある。遺構の西は調査区外となり、北を D - 7、南東を D - 9 に切られているため、平面形状は判然としない。残存値で長軸 63cm、短軸 44cm、深度は 28cm である。

D - 9

本遺構は調査区の中央北にある。北西の D - 8 に切られている。平面形状は長方形で、長軸 80cm、短軸 59cm、深度は 21cm である。

D - 10

本遺構は調査区の中央北にある。遺構の西の一部は調査区外となり、南は H - 3 と重複しているため、平面形状は判然としない。残存値で長軸 91cm、短軸 58cm、深度は 22cm である。

D - 11

本遺構は調査区の中央やや北にある。西の H - 3 と近接している。平面形状は長方形で、長軸 86cm、短軸 63cm、深度は 22cm である。

D - 12

本遺構は調査区の中央にある。西の H - 3 と近接している。遺構の東は調査区外となるが、平面形状は判然としない。残存値で長軸 59cm、短軸 28cm、深度は 43cm である。

D-13

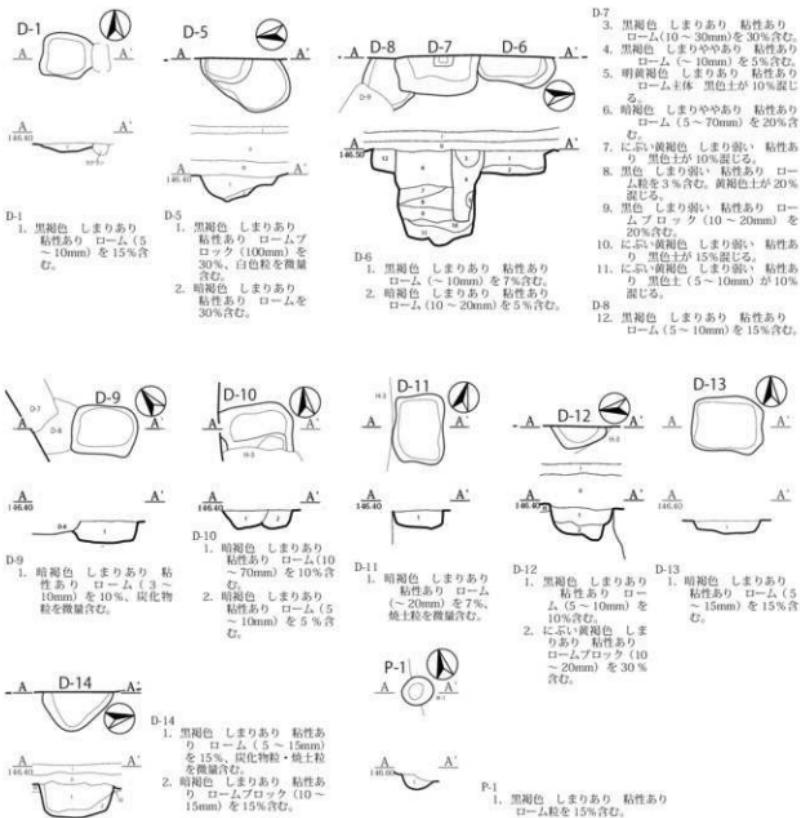
本遺構は調査区の中央南にある。平面形状は長方形で、長軸 88cm、短軸 69cm、深度は 15cm である。

D-14

本遺構は調査区の南にある。遺構の西は調査区外となるが、平面形状は長方形と想定される。残存値で長軸 76cm、短軸 60cm、深度は 41cm である。

P-1

調査区の北にある。W-1 に西の一部を切られている。平面形状は円形で、長軸 20cm、短軸 17cm、深度は 11cm となる。出土遺物はなく時期は不明である。W-1 より古い遺構となる。



第 18 図 土坑・ピット 平面・断面図

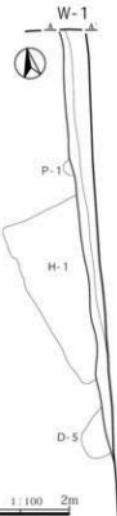
0 1:60 2m

W - 1

調査区の北にある。遺構の東側は調査区外となり、全体の規模は不明である。遺構はH - 1、P - 1、D - 5を切っている。主軸はN 5° Eで、残存高さ9m、残存深度は12cmである。出土遺物はない。覆土はやや砂質で旧耕作土の下から掘り下げられており、近代の遺構の可能性がある。



W - 1 完成 北から



第19図 W - 1 平面・断面図

第V章　まとめ

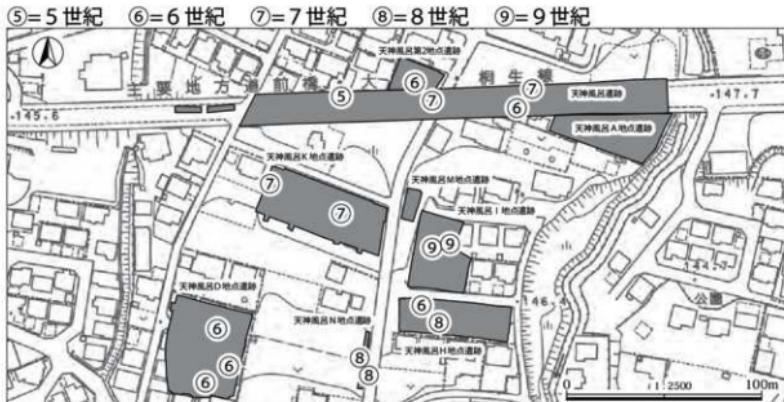
本遺跡のある天神風呂遺跡群は東西が谷となる台地上にあり、これまでに南北700m、東西200mの範囲内を天神風呂遺跡（各地点）で13回と、茂木源訪B地点遺跡の調査が行われている（第20図）。これらの遺跡群では、縄文時代と古墳時代～奈良・平安時代に至る集落遺跡が確認されている（第12表）。今回の調査（天神風呂N地点遺跡）では、縄文時代と奈良・平安時代の遺構が確認できた。

縄文時代の遺構は土坑のみであるが、出土遺物は前期の土器が確認されている。周辺の遺跡では、北にある天神風呂K地点遺跡で縄文時代の竪穴建物が2軒、土坑が22基、西にあるD地点遺跡では、縄文時代の竪穴建物が2軒、土坑が90基以上、東にあるH地点遺跡では、縄文時代の土坑が16基ある。この点で、本遺跡は竪穴建物は確認できなかったものの、縄文時代前期の集落に該当するものとみられる。

古代の竪穴建物はすべて調査区外に広がるものであり、完全な状態で確認できたものはなかった。これらの遺構の遺物は破片資料が多く、床面から出土する遺物も少ないが、年代はおよそ8世紀～10世紀ごろまでの遺構で、奈良・平安時代に該当する集落の一部とみられる。この中でH - 3とH - 6が6m以上の大型の竪穴建物となる。天神風呂遺跡群では、縄文時代を除けば5m以上のものは大型の竪穴建物となる。遺跡群で5m以上の竪穴建物が確認できる範囲は、天神風呂第2地点遺跡から南、天神風呂D地点遺跡・天神風呂N地点遺跡から北の範囲となる（第21図）。この範囲の中で5世紀～7世紀にかけての大型竪穴建物は天神風呂遺跡・天神風呂第2地点遺跡・天神風呂K地点遺跡・天神風呂D地点遺跡・天神風呂H地点遺跡にあり、北西部に多くみられる。一方、8世紀～9世紀にかけての大型竪穴建物は、天神風呂I地点遺跡・天神風呂H地点遺跡・天神風呂N地点遺跡で、南東部に集中している。本遺跡で確認されたH - 3とH - 6は、南東部に分布する大型竪穴建物群の一角であったとみられ、本地点が8～9世紀頃の集落の主要な位置であったと考えられる。



第20図 天神風呂遺跡群の各調査地点位置



第21図 天神風呂遺跡群内における大型建物の分布図 (○が建物位置。数字は時期を示す)

第12表 天神風呂遺跡群の時期

番号	遺跡名	縦文	古墳	奈良	平安	文献・備考
①	天神風呂遺跡	○	○	○	A.	周辺から瓦塔出土
②	天神風呂第2地点遺跡		○		C.	
③	天神風呂A地点遺跡		○		C.	
④	天神風呂D地点遺跡	○	○	○	C.	
⑤	天神風呂E地点遺跡	○	○	○	C.	
⑥	天神風呂F地点遺跡	○	○	○	C.	浄瓶(8世紀代)
⑦	天神風呂G地点遺跡	○	○	○	C.	
⑧	天神風呂H地点遺跡	○	○	○	C.	
⑨	天神風呂I地点遺跡	○	○	○	C.	
⑩	天神風呂J地点遺跡	○	○	○	C.	
⑪	天神風呂K地点遺跡	○	○	○	C.	
⑫	天神風呂L地点遺跡	○	○	○	B.	
⑬	茂木藏跡B地点遺跡	○	○	○	C.	
⑭	天神風呂M地点遺跡	○	○		D.	
⑮	天神風呂N地点遺跡	○	○	○		本報告書

A.『天神風呂遺跡』1981

B.『天神風呂遺跡群』2006

C.『大和遺跡要覧』2008

D.『天神風呂M地点遺跡』2019

写真図版



1. 調査区全景 南から



1. JD - 1 完掘 南から



2. JD - 1 遺物出土状況 南から



3. JD - 2 完掘 南から



4. JD - 3 完掘 南西から



5. H - 1 完掘 南から



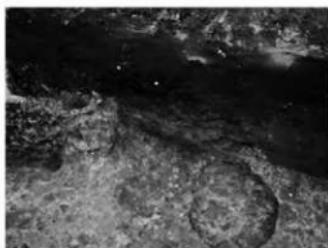
6. H - 2 完掘 西から



7. H - 3 完掘 西から



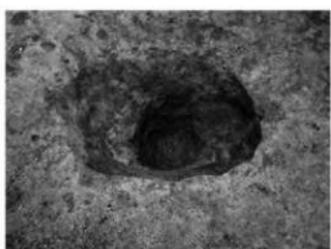
1. H - 3 遺物出土状況 南から



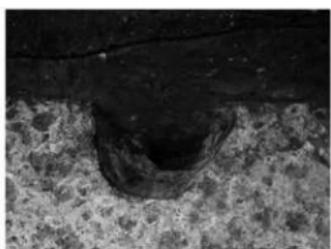
2. H - 3 カマド 完掘 西から



3. H - 3 P 1 完掘 西から



4. H - 3 P 2 完掘 西から



5. H - 3 P 3 完掘 東から



6. H - 3 挖方 完掘 北西から



1. H - 4 完掘 南から



2. H - 5 完掘 南から



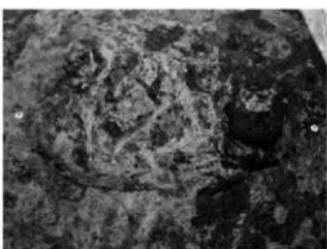
3. H - 6 完掘 西から



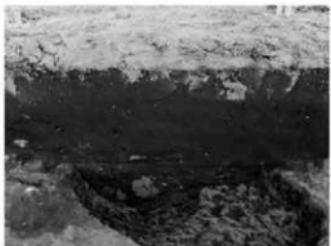
4. H - 6 挖方 完掘 北西から



5. H - 6 P1・P2 完掘 南から



6. D - 1 完掘 南から



1. D - 5 セクション 西から



2. D - 8・7・6 完掘 東から



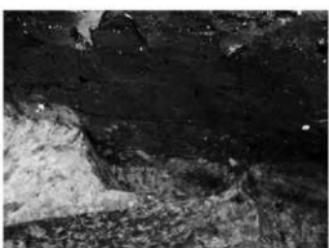
3. D - 8・9 完掘 南から



4. D - 10 完掘 東から



5. D - 11 完掘 南から



6. D - 12 完掘 南から



7. D - 13 完掘 南から



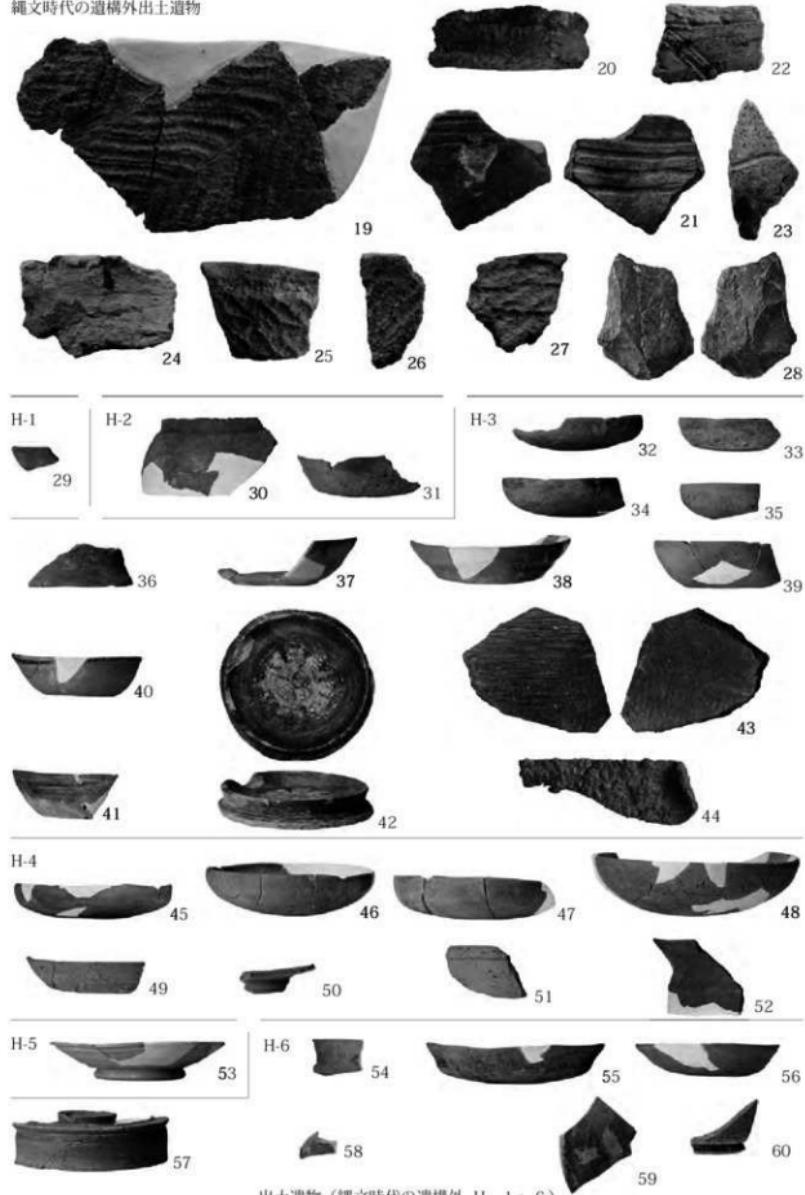
8. D - 14 完掘 東から

JD-1



出土遺物 (JD-1~3)

縄文時代の遺構外出土遺物



出土遺物（縄文時代の遺構外、H - 1 ~ 6）

報告書抄録

ふりがな	てんじんぶろえめちてんいせき							
書名	天神風呂N地点遺跡							
副書名	市道 00-360 号線（大胡 110 号線）道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	青木利文・石塚久則・城ゆかり・谷藤龍太郎・並木史一							
編集機関	山下工業株式会社 〒 371-0244 群馬県前橋市藤毛町 207-8							
発行機関	前橋市教育委員会 文化財保護課							
発行年月日	2020 年 3 月 2 日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査対象面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
天神風呂 N 地点遺跡	群馬県前橋市茂木町 241、242-1	10201	0191 (1111)	36°24'32"	139°09'05"	2019.9.20 / 2019.10.10	93m ²	道路築造
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
天神風呂 N 地点遺跡	集落跡	縄文時代	土坑 3基	縄文土器（前期） 石器	J D - I はフラスコ状の土坑となる。時期は前期中盤となる。			
		奈良時代	堅穴建物 6軒	土師器 環・甕 須恵器 環・甕	天神風呂遺跡群の奈良時代から平安時代にかけての集落遺跡の一帯。			
		平安時代	土坑 11基	転用鏡				
		近世以降	溝 1条					

天神風呂 N 地点遺跡

—市道 00-360 号線（大胡 110 号線）道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2020 年 2 月 25 日 印刷

2020 年 3 月 2 日 発行

編集 山下工業株式会社
発行 前橋市教育委員会
印刷 朝日印刷工業株式会社
